

親和会会報

白坊隆書

16号
2006.5



第154回親和会を終えて

第154回親和会運営幹事代表
化学システム工学専攻助教授
阿久津好明（昭和55年卒）

第154回親和会総会・懇親会は平成17年11月12日（土）16時から京王プラザホテルにおいて149名という多数の方々にご参加いただき、無事終了しました。

総会では、理事退任の件、理事選任の件について承認がなされ、平成16年度会計報告、事務局活動報告が溝部事務局長よりありました。

懇親会では、三浦会長のご挨拶に続き、今年度より東京大学総長に就任された小宮山宏先生からご挨拶をいただきました。国立大学が法人化されて2年目の東大の現況や今後の展開などをお話になられ、



最後は新しい取り組みを予告され話を締めくくられましたが、総長としての大観のある



お話に一同聞き入りました。続いて、昭和21年卒宮内健様のご発声による乾杯により懇談が始まりました。例年通り、参加者が知り合い同士で固まらないように

受付時のテーブル指定を行い、初対面の方々の交流の輪がこちらで広がりました。

懇親会中盤では、大学院親和会スポーツ大会の表彰式が行われ、三浦会長から賞品が授与され、次にいよいよお待ちかねのアトラクション



が披露されました。今年度は昭和55年卒と平成2年卒の学年が幹事を担当し、議論を重ねた結果、『本郷界限は今？』と題して、本郷キャンパ



ス内外の写真をスライド上映することになりました。平成2年卒幹事、荒木猛司、小笠原慶、野村幹弘の各氏が中心となって練り上げた企画で、荒木氏の絶妙なナレーションとともに、学内の新しい施設や学外の食堂の現在の写真などが上映されました。何人もの方々から学内は今こうなっているのか、あの食堂はまだあったのかなどの感想をいただきました。皆様の思い出の場所が現在どうなっているのか学生時代に思いを馳せ、また、東大内の変容

ぶりをご確認いただけたものと思います。しばし歓談の時間となり、最後に次期幹事から力強い挨拶があり、御園生誠副会長からの閉会の挨拶により懇親会が終了しました。



親和会には今まで一度も出席したことがなかったにも係わらず、諸般の



事情により幹事代表の役割を引き受けることになった私ですが、他の幹事の方々や事務局、さらにはご出席いただいた方々などのおかげでなんとか無事に遂行することができました。また同期の者だけではなく多くの方と親交できる親和会のよさも実感した次第です。東京大学全体のOB会組織も立ち上がっています。親和会から足が遠のいていた皆様も次回以降、是非、参加していただき、親和会を盛り上げていただければと思います。皆様に厚く御礼申し上げます。今後の親和会のさらなる発展を祈念して、報告を終わらせていただきます。



第155回親和会のお知らせ!

日時：平成18年11月11日（土）
16:00～18:00
場所：京王プラザホテル（新宿）
本館4階 花
企画：『5号館は今……』

5号館内の現在を、様々な角度から写真と動画と音声付きキャプションにてご紹介します。お楽しみに!

運営幹事：昭和56年卒・平成3年卒

温故知新

東大紛争の思い出

秋田 一雄（昭和59年退官）

東大紛争が始まったのは昭和43年（1968）。発端は確か医学部の学生が研修医制度に反対してストをしたことだったように記憶する。それが他の関連した問題を引き起こし、殆どの学生を含めた全学的な紛争に拡大した。助手を交えた学生側も東大共闘を結成したが、やがてそれは他大学の学生をも含む全学連と東大との紛争になり、建物の占拠や学部長の監禁といった不法で過激な事態になっていった。当然、その間には大学と学生との間の各種の集会や交渉が多く行なわれ、また機動隊導入の是非の議論などもなされたが、最終的には翌昭和44年（1969）1月の安田講堂における全学連と機動隊の烈しい衝突に発展したことはご存知の通りであろう。この紛争は入試の中止などの後遺症を残し、さらに、それは地方大学にまで拡大していった。

学部には総長の護衛とか門番といった色々な雑用が割り振られてくる。私も本郷構内を封鎖するための門番を何度かしたことがある。無理に入ってくる学生に「入るな」と言う。「誰がそんなことを決めたんだ」とくる。「大学だ」では理由にならないし、何を言っても止められないから無力感は否めない。当時の先生方にもタカ派もおられればハト派もおられたように思う。その頃こんな言葉をよく耳にした。「筋が通っても通らなくても、協力するのは工学部、筋が通れば協力するのは法学部、筋が通ろうと通るまいと何も協力しないのが文学部」。何となくその学部のイメージを表しているそうである。また、「止めてくれるなおっかさん 背中銀杏が泣いている 男東大どこへいく」といったポスターが現れたのもこの頃である。

工学部でも毎日のように議論がなされたようであるが、実務的な問題への対応が主で理念的な考え方はあまり聞こえてこなかった。5号館で特に問題になったのはこの建物には危険な薬品が沢山あることで、これが占拠されると大変なことになるから、それを防ぐにはどうするか。泊まり込みなどは当たり前、全学連の幹部に5号館の学生がいるなどもよく話に出ていた。

しかし、何といっても山場は、安田講堂と工学部1号館にバリケードを築いて立てこもった、各種のセクトからなる全学連と機動隊の全面的な対決である。こ

れは2日間にわたり、上空にはヘリコプターが飛び、正門前には報道陣のカメラの放列が出来る中、ガス弾や放水と火炎瓶、投石がとびかう異常な光景はとても大学とは思えない凄まじさであった。この間、私は連絡要員として正門前にほど近い建物の詰め所に何人かで待機して、朝早くから夜遅くまで其処と東大構内を何度も行ききした記憶がある。

考えてみれば、東大紛争は何も生産的なところはないから、本来の仕事には無駄な時間であったかも知れないが、新入りの一教官としては貴重な経験を与えてくれた出来事であったと思っている。改めて、その時お世話になった多くの方々にお礼を申しあげたい。

惜別の春

化学・生命系では、次の教職員の方々が退職及び転出されました。

大越 慎一助教授	理学系研究科教授
引地 史郎助教授	神奈川大学教授
海老原 学助手	東京理科大学講師
岡林 潤助手	東京工業大学助手
岸本 健史助手	ソニー株式会社
高羽 洋充助手	東北大学助教授
横井 俊之助手	東京工業大学助手
伊藤 葵技術職員	定年退職（再任用）

会費納入のお願い！

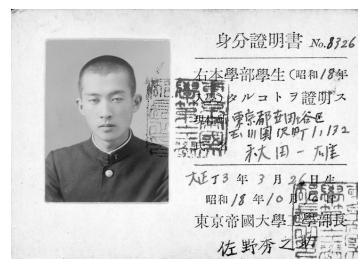
平成18・19年度分
4,000円

同封の郵便振替用紙をご利用下さい

年会費納入に付きましては日頃より皆様のご理解をいただき、誠にありがとうございます。

親和会のデータ管理、会報発行等は、皆様の会費で賄われております。

今期もご協力の程宜しくお願い致します。



秋田先生より大変貴重な写真をお借りしました。（事務局註）



リレー・エッセイ⑭

ローバーに乗って 感じる

東京工科大学副学長

軽部征夫（東京大学名誉教授）



私の趣味のひとつにドライブがあります。実はドライブといっても、名所旧跡を訪ねるわけではなく、週末に近くに出かけるか、新潟の山荘までドライブするぐらいです。私が好んで乗っている車は、ローバーです。ご存知のようにローバー社は、イギリスで唯一になつてしまった最後の大衆車メーカーです。しかし、経営に行きづまりランドローバーはフォードに、ミニクーパーはBMWに買収され、残った乗用車のローバーは昨年倒産してしまいました。何故ローバーが好きなのかというと、現在の日本の車にない不完全さがあるからです。わが国の乗用車は、どの車をとっても室内の装飾や性能はほとんど申し分ないほどに完備しています。ところがこのローバーという車は、なんとなく昔の車を彷彿とさせるのです。

一昨年まで、ローバー800というセダンに

乗っていました。これは2600のV6エンジンを搭載していました。エンジンのほうは全く申し分ないのですが、室内は一昔前のアナログ機器が並び、すぐに軋み音が出て、なんとなく昔の車に乗ってドライブしているという感覚を味わえるのです。おそらくこの車は、高速道路を突っ走るよりイギリスの田舎をゆっくり走るのに適しているのかもしれませんが。これに5年ばかり乗りましたが、車検が近づいてきたので売却することにしました。次もやはりローバーに乗りたいということで、いろいろと探していたところ、立川の砂川にローバーのオープンカー専門店がある事がわかりました。早速、週末に立川まで出かけて行ってみると、古い年代のMGFから現在のMGまで並んでいました。新しい車を買うか、中古車を買うか悩んだのですが、MGFの方がレトロ調で親しみやすいスタイルであるのが気に入りました。早速、1998年製のブリディッシュグリーンのローバーを手に入れました。今から見ると8年前の車ですが、程度は上々であり走行は2万kmにもいっていませんでした。これならしばらく乗れるだろうという事で購入を決めました。

さて、このローバーを整備してもらって夏に新潟の山荘へドライブをしました。ところが途中で雨になり、ウィンドウとキャンバスシートの間から雨がしとしと漏ってくるのではないですか。雨漏りなんて経験した事が無いので、これをどうやって止めるかで大いぶ苦労しました。また、すぐにワイパーが壊れてしまい、修理工場に入れたら部品が手に入らないといわれ、結局は古いワイパーを分解して再生し、装着することにしました。幸いにもモーター部分は部品で手に入ったので何とかワイパーが回るようになりました。初めについていたステレオは、テープ用のステレオでしたが、これではソフトがないのでやむを得ずCDステレオに換えてもらいました。ドアミラーを合わせるのも手動です。また、その調節レバーが良く落ちてしまい、しょっちゅうドアミラーを調整し直さなければいけません。パーキングブレーキも効きが悪いので調整してもらいましたが、相変わらず利きが良くならないので、あきらめてそのまま乗り続けています。大雨が降れば雨漏りするし、まさに世話を焼かせる車です。しかし、1800のツウインカムエンジンはとてもよく回り、加速性も十分にあり、高速道路では極めて安定した走りを示します。乗り心地が悪いのと、大きな音を気にしなければ結構走りを楽しめるのです。

ワイパーが壊れてしまい、修理工場に入れたら部品が手に入らないといわれ、結局は古いワイパーを分解して再生し、装着することにしました。幸いにもモーター部分は部品で手に入ったので何とかワイパーが回るようになりました。初めについていたステレオは、テープ用のステレオでしたが、これではソフトがないのでやむを得ずCDステレオに換えてもらいました。ドアミラーを合わせるのも手動です。また、その調節レバーが良く落ちてしまい、しょっちゅうドアミラーを調整し直さなければいけません。パーキングブレーキも効きが悪いので調整してもらいましたが、相変わらず利きが良くならないので、あきらめてそのまま乗り続けています。大雨が降れば雨漏りするし、まさに世話を焼かせる車です。しかし、1800のツウインカムエンジンはとてもよく回り、加速性も十分にあり、高速道路では極めて安定した走りを示します。乗り心地が悪いのと、大きな音を気にしなければ結構走りを楽しめるのです。	
我々は、壊れないのが当たり前、全ての装備がついているのが当たり前になってしまっていますが、このMGFに乗ると、まさに車の原点に帰ったような気がします。どうも我々は、パフォーマンスな日本の車に慣れてしまい、車を維持したり、修理したりする楽しみを忘れてしまっています。こんな話をイギリス人が聞いたら、馬鹿にしていると思われるのですが、まさに車好きにとってはたまらない1台です。	

第154回親和会総会報告

親和会理事・事務局長 溝部 裕司

第154回親和会では、左記の各議題が審議され、理事会案通り承認されました

1 監事退任の件

浅野 正之（昭和38年燃料工学科卒）

2 理事選任の件

千葉 泰久（昭和43年合成化学科卒）
上野 徹（昭和45年化学工学科卒）
佐々木 登（昭和46年工業化学科卒）
岡田多佳子（昭和57年反応化学科卒）

《平成17年度会計報告》

収入の部		
平成16年度繰越金	7,180,991円	
会費	346,110円	
154回親和会余剰金	94,685円	
第154回利息	118円	
合 計	7,621,904円	
支出の部		
印刷費	435,891円	
通信費	1,357,640円	
親和会組織化費	38,000円	
大会親和会支援費	92,678円	
事務局運営費	1,316,615円	
未収金	-398,370円	
合 計	2,842,454円	
繰越金	4,779,450円	

5号館通信

No.3

化学生命工学専攻長 教授 加藤隆史



第3回目は、中尾先生・北森先生からは紹介されていない話題、またそれ以降

降の話題を中心に述べさせていただきます。5号館の平成18年度が始まりました。化学・生命系は、最近の傾向を維持して相変わらず人気が高く、応用化学科・化学システム工学科・化学生命工学科で合計155名の希望に燃えた新学部3年生が進学してきました。これは、5号館の教職員と学生のアクティビティーの高さが魅力的に見えている結果であり、教職員一同、この努力を続けて行きたいと思えます。3年生は、朝8時半からの1時限の授業に始まり、夕方5時あるいは6時ごろまでの午後の学生実験をこなしながら、本郷の学生らしくなります。また、5月祭が今年も5月27、28日に行われます。今年も5号館では、新3年生が中心となり、「ばけミストリー」というテーマで展示等が行われます。最近の傾向としては、かなり受動的、教員任せのところがあります。しかし、担当の学生はがんばって準備をしています。

新4年生、また新大学院生は、順調に

各研究室で各自の研究生生活を始めています。研究の内容には、伝統的なキーワードに加えて、ナノテクノロジー・バイオテクノロジー・超分子・環境などと、一昔前とはだいぶ違うキーワードも並んでいます。5号館の教育・研究の共通基盤はいうまでもなく「化学」という学問ですが、多様な形で、最先端科学を先導あるいは支えていることを示しています。

学生たちは、ほとんどは大学院修士課程に進学し、そのうち、約30%の学生が博士課程に進学します。その後、社会に羽ばたくわけですが、最近特に目につくのが企業への就職状況の様変わりです。バブル崩壊以降、どの企業も採用を絞ってきたのですが、景気の回復を反映して、企業の積極的な採用が目立ちます。さらに、応募と採用の就職活動プロセスも様変わりしています。学生たちが企業に関して情報を得るのも、応募するのも、今ではインターネットが完全に主役の座にきました。学生は企業のホームページを通して、多数の企業に同時に応募していきます。したがって、第一次・二次・最終面接などと、毎日のように出かけていくことになりました。人気企業は多くの希望者が集まり、5号館の学生といえども次々と落とされます。さらに、就職活動の時期が早まっています。かつては、修士2年の5月から7月にかけて就職活動を行ったものですが、今は、修士1年の冬の段階で始まる業種もあります。このため、修士課程は2年しかないのに、研究者としての基礎を作るべき最も重要な時期を落着かず過ごすことになりました。我々、教員はこれを好ましいものと思っておりません。

それから一つ大きなニュースがありま

す。平成17年4月から小宮山宏先生が、総長に就任されました。全体の運営に関して、いろいろな努力が続けられているところですが、学生に語りかける熱意も持続されています。昨年度、学術俯瞰講義という駒場の授業を、総長自ら4回行われました。題して、「物質を作り使う」。半導体・金属・ソフトマター・環境などに関する一本筋の通った面白い授業は出席した学生達に感銘を与えました。

組織に関しては、最近、工学系研究科内に新しい専攻としてバイオエンジニアリング専攻が誕生しました。化学・生命系をはじめ、電気系・機械系・マテリアル系などの工学系各専攻から、教員が専任・協力などの形で支えている横断型の専攻です。ケミカルバイオエンジニアリング・バイオマテリアル・バイオエレクトロニクスなどといった部門が並んでいます。

変化のスピードは速くなっていますが、化学・生命系の教職員は、どんな時代にも本質を見据えて、優れた教育・世界をリードする研究をすべくがんばっていますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

事務局のご案内

〒113-8656

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学工学部5号館内

TEL/FAX: 03-5841-7400

E-Mail: shinna@chem.t.u-tokyo.ac.jp

http://www.shinna.iis.u-tokyo.ac.jp

事務担当者 近藤 檀(月~土)

編集後記

卒業生と話してみると、親和会報が届いても全く見ていない、とおっしゃる方が結構おられるのは意外でもあり、また大変残念です。ご本人は親和会のごに関心がなく、殆どご存じないため、どうでもいいDM同様、開封もせず最後はゴミ箱行きとなるようですが、親和会とはとなく、ご自分がかつて学んだキャンパス、学科、恩師たちのことに全く興味が無いとは思えず、面倒がらずに開けて眺めていただきたいと思います。ここに書いても肝腎の方の目には届きませんが、

今号の温故知新では秋田先生が東大紛争についてお書きになっています。私の恩師の話でもよく端々に東大紛争のことが出ましたので、きつとどなたかがお書き下さると思っていました。大学側だった方々は既に大学を去られ、そして当時の学生だった人々も、まもなく定年を迎え始めます。キャンパス内も当時とは様変わり、人々も大部分が紛争後ずっと経ってからの生まれで、当時の騒然とした雰囲気を知る由もない。思いがけぬほど長い時間が経過していることにあらためて気づき、しばし感無量でした。

(記/溝部)

